

疫病と世界史

大阪市立大学大学院経済学研究科教授 脇村孝平

SARSの衝撃(21世紀)

ほぼ1年前の冬から春にかけて、新聞の紙面を賑わしたのは、謎の病気SARS（重症急性呼吸器症候群）であった。SARSは、中国の南部を発生地として香港、さらに台湾・シンガポール・ベトナムといった近隣地域、遠くはカナダ、アメリカ、ヨーロッパまで、感染の爪が伸びた。2003年8月初旬までの累計で916人の死者を数えて、昨夏には収束した。結果的には、日本では1人の患者も出なかったし、SARSの恐怖は杞憂に終わるかに見える。だが、この冬から春にかけて、SARSが再発するかもしれないという危惧は依然として存在する。筆者は、SARSへの恐怖が最も喧伝されたとき、かつて猛威を振るった「スペイン風邪」のことを想起した。後にふれるように、1918年に世界的な流行となったこのインフルエンザは、世界疫病史においても稀にみる大惨事となったが、人類はそうした悪夢の再来を完全に否定できるところにはまだいない。

SARSの正体は、コロナ・ウイルスであることが判明しているが、空気感染があるか否かなど、感染のあり方について未だ不明な点が残っている。しかし、患者との接触が感染につながることは明白である。したがって、検疫や防疫という感染者の移動を監視し管理する古典的な公衆衛生の手法が、改めて脚光を浴びた。

歴史を顧みても、交通や人の移動が疫病の発現と関わる事例は多数見られる。とくに、世界の一体化（グローバル化）が進展するときに、未曾有の疫病が起こるといった事例が存在する。その意味で、「疫病と世界史」というのは、好事家好みのキャッチフレーズでは決してない。ここで強調し

たいのは、疫病の発現が世界史の形成の本質的な部分に関係していたという点である。以下、大規模な疫病の発現が世界史における「帝国」の展開過程や世界の一体化（グローバル化）といった事態に、如何に関連しているかを明らかにしたい。

黒死病とモンゴル帝国(14世紀)

1346年に黒海に面する通商都市カフファで始まったペストの流行は、続いて地中海地域、さらにはヨーロッパの北部と西部に広がった。これが、いわゆる「黒死病」の流行の端緒である。ヨーロッパにとって、ペストは未知の病というわけではなかった。ユスティニアヌス大帝在位中の542年に地中海地域を襲った疫病は、ペストであったとされている。これは、8世紀頃まで断続的に流行した。しかし、それ以来、ペストの流行はなく、その意味でほとんど未知の病といってよい状態となっていた。概して、人類は未知の感染症と出会ったときに大きな衝撃を受ける。周知のように、ペストの衝撃は大きく、ヨーロッパの人口の三分の一近くが亡くなったといわれている。ペストは、しだいに被害の規模は軽減化したが、17世紀までヨーロッパで繰り返し流行した。

実は、14世紀におけるヨーロッパの黒死病は、モンゴル帝国の世界的拡大に付随して起こった現象であると考えられる。ウィリアム・マクニールは、黒死病流行の前提として、モンゴル帝国による東西交通の発展を指摘する。すなわち、ユーラシア大陸の中央部に位置する大草原地帯（乾燥地帯）が、ペストの発生地として考えられている。モンゴル軍は、ペストが風土病化している中国南部の雲南・ビルマに遠征した後、感染したノミとともにペスト菌を故郷の中央アジアへ持ち帰った。

中央アジアの草原地帯に生息する齧歯類がこれを保菌することとなった。その後、ペスト菌は、中央アジアを起点として、初めに中国へ伝播し、続いて黒海地域を経由してヨーロッパに波及した。14世紀に、中国においてもペストと推測される疫病が蔓延したようである（W.H.マクニール、佐々木昭夫訳『疫病と世界史』新潮社、1985年）。

ユーラシア大陸では、紀元後から徐々に発達してきた交易ルートを基盤として、人の移動の結果として各地域がそれぞれ特有の疾病（病原微生物）を相互に交換しあってきた。すなわち、ユーラシア大陸それぞれ自体が一つの「疾病の貯水池」（disease pool）となっていた。しかし、ユーラシア大陸の疾病史においても、モンゴル帝国の時代は、大きな転換期であった。モンゴル帝国の興隆と相前後して、中央アジアの隊商交易、とくに東西の交通が一段と発展した。ジャネット L.アブー=ルゴドによると、13世紀は、ユーラシア大陸の内陸交通とインド洋における海洋交通が有機的に結合し、いわば「13世紀世界システム」とでも呼ぶべき状況が現出したとされている（ジャネット L.アブー=ルゴド、佐藤次高他訳『ヨーロッパ覇権以前—もうひとつの世界システム』2冊、岩波書店、2001年）。ヨーロッパにおける黒死病流行の前提として、このような世界の一体化（グローバル化）の進展を考える必要がある。

13世紀のマルコ=ポーロ、14世紀のイブン=バットゥータといった大旅行家が、今日の私たちが日本語で読める旅行記を残してくれていること

はありがたいことである（マルコ・ポーロ、愛宕松男訳『東方見聞録』2冊平凡社、2000年；イブン・バットゥータ、家島彦一訳『大旅行記』8冊、平凡社、1996年～2002年）。これらを読むと、アブー=ルゴドのいう「13世紀世界システム」を実感できる。今日の旅に比べるとはるかに苦難に満ちているが、それにもかかわらずこのように人が移動できた事実が重要である。

日本史に関連して付け加えておこう。13世紀の後半に起こったいわゆる「元寇」は、日本史の帰趨をも左右しかねない大事件となった。これは、モンゴル帝国の世界的な展開が、ユーラシア大陸の東端に波及した末のことであった。しかし、その2回にわたる試みは海という障壁もあって失敗に終わった。これには、疾病史上の補足的エピソードが加わる。すなわち、ペストも海という障壁によって日本への伝播が阻止されたのである。この事実もまた、疾病史上特記されるべき事柄である。

「コロンブスの交換（16世紀）」

コロンブスによる「新大陸の発見」は、疾病史において空前絶後の事態を引き起こした。コロンブスがアメリカ大陸に到達して以降、スペイン人とともに大西洋を渡った病原微生物が、この大陸の先住民社会に与えた人的被害は想像を絶するものであった。一例を挙げよう。かつてアステカ帝国が存在した中央メキシコの人口は、1548年の603万人から1608年の107万人に激減したと推定されている（M. Livi-Bacci, *A Concise History of World Population*, Massachusetts, 2001, p.46）。コルテスと部下の兵士たちがこの地域にやってきたのは1519年のことであったから、人口減少の規模はもっと激しかったに違いない。アメリカ大陸のいたるところで疾病によるジェノサイドともいえるべき事態が起こった。

なぜこのようなことが起こったのか。これは、アルフレッド=クロスビーが「処女地の疫病」と呼んでいる現象によるものであった。「ヒトの生涯の最も油ののりきった青壮年時代に、頑健にして強壮な免疫システムは、もし前例のない侵入者

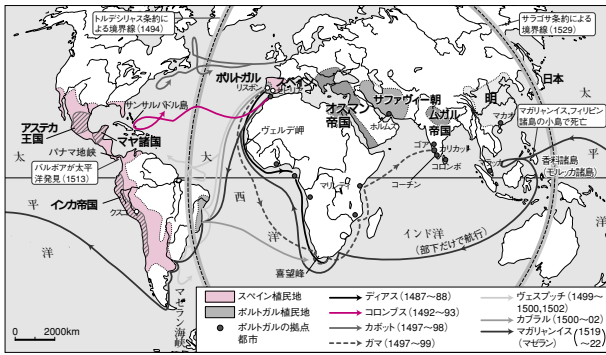


図2 大航海時代の世界 (『新編高等世界史B新訂版』)

の襲撃を受けると過度に反応し、炎症と浮腫を起こして通常の身体機能を窒息死させてしまう」(A.W.クロスビー、佐々木昭夫訳『ヨーロッパ帝国主義の謎-エコロジーから見た10~20世紀』岩波書店、1998年)からであった。アメリカ大陸は、ユーラシア大陸の「疾病の貯水池」から長らく隔てられていたために、ユーラシア大陸では長い時間の経過の中で馴化した疾病が、ここでは致死的な症状に帰結したのである。アメリカに新しく登場した感染症のリストには、天然痘・麻疹(はしか)・チフス・インフルエンザ・ジフテリア・百日咳などが挙げられる。

感染症をもたらしたのは、ヨーロッパ人だけではなかった。先住民社会の急激な人口減少による労働力不足に対処して、ヨーロッパ人は16世紀の前半には西アフリカから奴隷労働の導入を図っている。アフリカからの奴隷労働の流入とともに、マラリアや黄熱病といった感染症がアフリカ大陸からやってきた。これらは、西インド(カリブ海)地域を中心に、アメリカ大陸の熱帯部分に蔓延した。これらの疾病は、先住民社会にはさらなる追い打ちとなっただけではなく、ヨーロッパ人にも襲いかかった。先住民やヨーロッパ人に比べると、アフリカ人たちはこれらの疾病に抵抗力を有していたために、この熱帯地域における主要な労働力として、その後大量に導入される。西インド諸島の砂糖プランテーションなどにおける奴隷制の隆盛には、このような疾病史上の理由も関わっている。

大西洋を挟んだ両大陸では、人の移動にともなう病原微生物のみならず植物や動物も相互に海

を渡ったが、アメリカ大陸は新しく流入した新種の植物や動物によって制圧され、植物相も動物相も一変した。クロスビーは、大航海時代に病原微生物・植物・動物が大陸間で交換されたことを「コロンブスの交換」と呼んだが、その収支決算は圧倒的にヨーロッパにとって有利であったということになる。ヨーロッパにとっての新大陸の獲得は、比喩的には「更地」が一挙に倍増したような結果になったといえる。そのことは、南北アメリカ大陸の両温帯部分において、人口の大半がヨーロッパ出自のびとやその混血種になり、自然景観もヨーロッパと非常に類似したものとなったことであらわれている。いわば「ネオ・ヨーロッパ」がそこに誕生したのである。

いうまでもなく、大航海時代は、世界の一体化(グローバル化)を進めるうえで重要なエポックであった。その時代に、再び疾病史上における未曾有の事態が発生したのである。

飢饉と疫病の時代(19世紀中葉~20世紀初頭)

19世紀の後半から20世紀の初頭にかけての英領インドは、まさに「飢饉と疫病の時代」というべき状況にあった。19世紀後半の半世紀に、1876~78年、1896~97年、1899~1900年の三大飢饉をはじめとして、少なくとも11回の飢饉に見舞われている。これらの飢饉による人的被害は大きく、たとえば1876~78年の飢饉では、推定の死者が500万人を超えるというものであった。また、飢饉とは別に、天然痘・コレラ・ペスト・マラリア・インフルエンザなどの疫病が流行し、これらもまた多大の人的被害をもたらした。ペストのみを取り上げてみても、1896年から1934年までの期間中に、約1250万人が亡くなったとされている。こうして、1871年から1920年までの50年間の人口増加率は、このようなたび重なる飢饉と疫病による死亡危機のために、0.37%にとどまった(1920年代以降は、かかる死亡危機も減少し、人口増加率も1%を超えた)。

この時代における飢饉の死者のうち多数は、飢饉に併発して起こった感染症(マラリア、コレ

ラ、天然痘など)によって亡くなった場合が多い。とくに、飢饉に連動して起こったマラリアによる人的被害は大きかった。飢饉とは独立して、19世紀全般に各地で流行したコレラ、19世紀末から20世紀初頭にかけてのペスト、1918年のインフルエンザ(スペイン風邪)、そしてこの時期全般を通じてのマラリアなど、疫病の人口変動への影響ははかりしれないものがある。

このような「飢饉と疫病の時代」は、今日まで通説的にいわれてきたように、イギリスの植民地的収奪による経済的停滞および貧困の帰結としてのみ理解されるべき事態であろうか。経済的に見るならば、この時代は、交通革命(鉄道と汽船の発達)によって牽引された輸出主導型の経済成長が多少なりといえども起こった時代である。1850年代以降のインド農業を規定したのは、世界経済(貿易)の急激な発展である。鉄道と汽船の導入による輸送費の大幅な削減は、付加価値の低い貨物輸送を飛躍的に増加させた。インドではとくに1870年代から第一次世界大戦まで、綿花・小麦・油用種子・ジュート・茶・米・皮革といった農産物の輸出が増加し、農業の商業化が進展した。

このような農業の商業化は、鉄道の発達、用水路灌漑の建設、プランテーション農業の展開という開発活動にともなって進行した。その意味で、この時代を、「植民地的開発の時代」と呼ぶこともできる。実はこの「開発」が、この時代における飢饉や疫病の被害の甚大化に大きく作用していたことに注目する必要がある。鉄道・道路の発達にともなう人の移動の増加、用水路灌漑の建設にともなう環境の変容(→マラリアの流行)、さらに都市化などが疾病環境を悪化させ、この時期の疫病の蔓延をもたらしたといえる(脇村孝平『飢饉・疫病・植民地統治—開発の中の英領インド』名古屋大学出版会、2002年)。

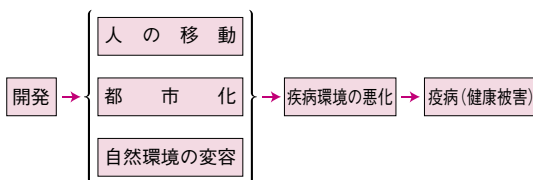


図3 疾病環境の悪化

19世紀後半から20世紀初頭にかけての世界は、既述の交通革命によって人とモノの移動が飛躍的に増大し、ここでもまた世界の一体化(グローバル化)が大きく進展した時代であるといえる。この時代に、モノやカネの移動のみならず、人の移動も著しく盛んになった。いわゆるヨーロッパから南北アメリカ大陸、オセアニアへの移民、また、中国・インドからのアジア内部への移民など、労働移民の流れも大きかったことはよく知られている。この時期に、コレラやペストがパンデミック(世界的流行)化したのは決して偶然ではなかったのである。インドは、この時期に世界経済との一体化を強めたが、飢饉と疫病の甚大化は、このような過程の帰結ともいえるのである。

インドにおける「飢饉と疫病の時代」の最後を飾ったのは、いわゆる「スペイン風邪」=インフルエンザ・パンデミックの波及であった。この世界的流行は、1918年のわずか数か月の期間に、世界で4000万人近くの人命を奪ったとされる。意外なことに、この大事件は、歴史の書物の中で十分な取り扱いを受けているとはいえない。この史上空前の大疫病は、インドだけで約1700万人の死者を出すという大惨事となった。このインフルエンザの被害の大きさは、やはり人の移動ということに関連していた。1914年から始まった第一次世界大戦は、1918年にはほぼ終局を迎えたが、軍隊の移動や難民といった激しい人の動き、そして混乱がこの世界的流行につながったことは明らかである。インドも、イギリスの植民地としてこの大戦に参戦し、インド人兵士はヨーロッパ・アフリカ・中東へ向かった。彼らの帰還は、インドにおけるインフルエンザの被害を高めたであろう。

筆者は冒頭でSARSの流行から「スペイン風邪」を想起したと書いたが、理由のないことではない。21世紀の初頭の現在、世界の一体化(グローバル化)の程度が一段階さらに飛躍しようとしているからである。それに加えて、温暖化などの地球環境問題が新興あるいは再興感染症の脅威をもたらしている。その意味で、疾病史上に、現代という時代を位置づけてみる必要があるのではなかろうか。